



学生歌の生まれた頃

S 3 4 年卒 加藤英子（旧姓 鶴若）

横浜国立大学の学生歌がどのように作られたか書くようにお話がありましたので、はるか昔と言っても良い頃のことですし、お恥ずかしいのですが、少し書かせて頂きます。

1955年（昭和30年）4月、私が国大芸学部への入学を許された春です。

横浜の町は随分元気で美しい所も増えていましたが、京浜急行の黄金町の駅前では10年前の惨状を、実体験した人から聞くことが出来ました。桜木町の駅前から市電に乗って本校の方に向かう、トンネルを過ぎて確か大和町だったと思いますが、狭い坂道を上って丘の上に建つ建物、旧女子師範の校舎であったものが、私達新入生の一年間学ぶ学舎でした。いわゆる一般教養を、三つの学部の学生が机を並べて学んだ所です。

昭和24年に発足した新制度下の国立大学として、私達の国大は日本中の他の大学と同じように、様々の思いの錯綜する中であつたのです。旧制度にあっては地方の名前を広く響かせた専門学校や師範学校を統合して、出発はしても大学としての姿、中身はまだまだという所であつたのです。名前は皆新制大学でも旧帝国大学や官立の大学と比べて、悪口を言う人からは蛸足大学だの駅弁大学だのと言われたものでした。

兎に角、立野の丘の上の一棟で私達は西洋哲学やら第二外国語やら学ぶ大学生としての生活を始めました。講堂でガイダンスを受けた時のちょっぴり背伸びしながら判らない自分の現実の不安とこそばゆさを思い出します。幾つかの教科では共に学ぶ工学部や経済学部の学生は2年時からの専攻科目履習では、弘明寺、清水が丘の校舎で学ぶので

す。私達は鎌倉です。そこでは常時先輩がいるのですが、立野ではたまに上級生の顔を見ることがあっても一年生だけの生活です。それまでの学習学業の深さには結構差があったようでした。

同じ一年生と言っても大学生はいろいろな年の人居るのに不思議はありません。立野の丘の校舎で学んだ人数は正確に何人であったか調べてみないので判りませんが3百人は居なかったと思います。この年日本全国で国立大学は72校あって学生数は約19万人いたのですが、その中の小さな学びの場では揺れている心がたくさんありました。

この学校のこの科に学ぼうと意気軒昂たる人も居たと思いますが、なかなかそうはいかない部分を持つ人も多かったのです。理由は大学の形ということもですが二期校であったことにも依ったでしょう。

一期校に思いを込めて受験したものの、武運拙くか力不足か、今は二次三次の希望だった此処に居る自分に不甲斐なさを感じている、もう一度受験生にもどろうか、だが諸々のしがらみと自分の置かれている場にやり切れないものを思っている。そういうことが語られているのを聞くのは少ないことではありませんでした。

新入大学生が一応志望した学校に入ってはみたものの、という悩みを抱くというのは、昭和30年の春の私達の身の廻りだけではないのですが、やはり今日此の頃とは違うところがあつたかなあと思うのです。時代というか社会全体が前に向かっていこうとはしていてもまだ貧しさを身につけていた頃でした。

どうしようもないふっきれない思いが大学の中にあるのを皆が感じ始めた頃、きちんとした日取りは忘れましたが、大学当局も入った形にして、学生自治会が学風創造運動と名付けて様々な動きが始まりました。他の校舎ではどんなであったか知りませんでしたが、歌声を盛んにしていくこと、サークル活動のいろいろな場面で学部を超えて仲間友達の輪を広げよう、話す場をふやそう、フォークダンスパ

一ティを開こうなどなどです。その中の一つに学生歌の募集があったのです。

梅雨のはしりのような日もある頃であったと覚えているのですが、幼い言葉で思いつきのように心に浮かんだままを書きとめた文本当にノートの一ページを、廊下の片隅に置かれてあった応募用紙の箱に入れました。幾つか入っていたようでした。

暫くして学生歌として、先生方も審査に加わって入選した歌が皆の通る廊下に貼り出されました。一席に入選されたのは確か国語科の方で飯田さんと仰言る方だったと思います。違っておりましたらお許し下さい。格調高い言葉の調べも美しい三連までの素晴らしいものでした。端っこの方に私の短い歌があって、後から国語科の先生の講評もメモで頂きましたが、御注意を頂いて本当だ、これじゃ駄目だと顔が赤くなりました。でも賞金をほんの少し頂きました。千円だか千五百円だかでした。クラブのお友達との会のビール代になりました。よかったね万歳と元気代です。そして歌詞に付ける曲の募集がなされました。一席の歌詞に曲がつくものとばかり思っていたのですのに、末席の私の歌を選んで曲を作って下さった方があったのです。そしてそれが横浜国大の学生歌「みはるかす」になりました。作曲者の大根田さんは工学部の方で、お会いした折にもうそれまでにも幾つもの曲を作っていたらっしゃると話して下さいました。そして人間の心と、普通の人々が普段いかにものを見ていないかを、面白い御自身のエピソードを交えて話されたのを覚えています。

つまり作曲なさる方の気持ちと何かちょっとだけ触れるものを持たた私の歌が、皆さんの心に残る時もあるという力を頂けた訳です。皆さんに忘れられずに歌って頂ける幸せを頂戴したと感謝しております。

学生食堂もない階段教室もない一棟だけの校舎、それもお古の建物の中で、いろいろな思いは交錯しながらも、専攻の異なる学生同志、様々な場面で友達として語り合いま

した。大教室の後でお弁当箱を広げる時に、古本屋で見つけた本を大事そうに見せて中身について質す時に。そして、もしかして一番のびのびと話したり笑い合ったりしたのは、休講の貼り紙が出て、ようしとばかり校舎の裏手の小高い場所に広がる野草の上に足を投げ出して座った時であったかもしれません。

少し足を伸ばせば三溪園まで歩いて、砂浜で裸足になって疲れを取ることも出来たのですが、話題は道の途中に眺めた景色のこともなりました。その頃、そしてその後も長い間、日本人には近寄ることの出来ない豊かな暮しを想像させる米軍家族の住宅が、広い芝生をきれいな緑色に刈り込まれて道一つ隔てて続いていました。今ではもう接収地ではなくなった筈ですけれど。

戦後という言葉も聞くことが少なくなっていた頃でしたが、男子学生は学生服に学帽を身につけている人がまだ多く、女子は多少の彩ありといってもスーツ姿が当たり前に通学時の服装でした。ハイキングも卓球やソフトボールも上着をとってそのまま楽しんだのです。

春は忽ち過ぎ、退学して別の学校に行かれた人もありました。素晴らしい成績を残した人も、先生方の眉をひそめさせた者も立野の丘を後にしました夫々の学部校舎での生活が始まったのです。

奨学金の支給日を楽しみにアルバイトをしながら、先輩や同じ科に学ぶ人、教室で一緒になる人から多くのものを学びました。

先生方からも沢山のお言葉を頂きました。その幾つかはその折の教室での状景、研究室の机の上の景色と共に思い出します。それらはしかし、専門書の難しい部分の質疑や教科の話から一步それたことに触れられた時や、戦中の御自分の体験を語られた時であったように思うのです。大学生という名前に値しないような自分だと当時も思っていましたし、今振り返っても学ぶことを知らなかった自らに臍を噛む思いなのですが、立野で、鎌倉での学生生活は段々

に前を向くものでありました。

所謂高度経済成長期に私は教師として社会人としての生活をスタートしました。多くの素晴らしい子供達とそのお母さんお父さん、力のある先輩同僚に支えられて、本当に有り難い教員生活を過ごしました。思えば一生懸命ではあっても間違いだらけミス多しのあれこればかり見つかるのですが、学校の夢は見ても、自分の子供の夢は見ないような者を家族は見守ってくれていた訳でした。

なつてみたい職業は沢山あったのですが教師を目指した理由は、小学・中学・高校・と素晴らしい先生方にめぐり逢えたからでもあります。頂いたものは数えきれない程の思いと言葉ですが、それを次に繋げることをやってきたかと問われると忸怩たるものがあります。

中学時代の恩師の「俺達は戦争に行った。お前らはそうじゃない良い世の中を作るんだぞ勉強しろ」という言葉を実践できたかなあとと思うと反省しかないので。

あの歌を作った頃、コンプレックスの固まりで目の届くところしか見えていない自分を何とかして広げたかったのかもしれない。海の見えない町から来たお友達の、海の広さと素晴らしさを説く声を聞きながら、立野の丘の上から眺めた海の色は忘れられないものですが、遠くからあの先生の声も聞こえていたのかもしれない。

2005年、もうすぐ次の年を迎えようとしている今、身の廻り社会を被う空気はどう言ったらよいのでしょうか。毎日の暮らしはささくれを見つけながら過ぎていきますが、見過ごしてはならないものを積み重ねてしまっている私達皆が、という気がしてなりません。時代が違ってきたのだからと言われても歌は一人一人を力づけ、振り返りながら前を見て行く勇気をくれるものもありそうです。願わくばいろいろな場で、少しずつ異なって受け取られても良いから、響きが皆に遠く遥かなものを見せているような歌にめぐり逢いたいと思っています。

平成 18 年(2006 年)発行「友松」96 号より転載

横浜国立大学学生歌 (1956年)

作詞 鶴若英子 学・教34卒

作曲 大根田 遼 ^{とおる} 工・機37卒

Moderato

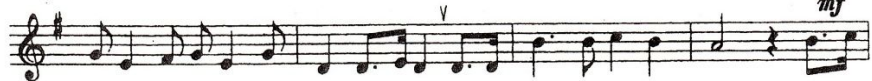
mf



1. み は る 一か 一す あ お うな 一ば らに の び
2. あ た ら 一し 一き よ を つく 一る も の ひ か



ゆ きて つ き せ ぬも のは わ れ らが お も い み ど
り あり の そ み をむ ねに わ れ らが み ち を く い



り こ き お か に の ほ りて と も に か た ら ん と も
の な き そ の ひ そ の ひを と も に す す ま ん と も



に ま な ば ん わ が 一 と も よ
に ま な ば ん わ が 一 と も よ

一、みはるかす 青海原に

のびゆきて 尽きせぬものは

我等が想い

緑濃き丘に登りて

共に語らん 共に学ばん

我が友よ

二、新しき 世を創るもの

光あり 望を胸に

我等が道を

悔いのなきその日その日を

共に進まん 共に学ばん

我が友よ